

# 花の画家 ルドゥーテ『美花選』展

後援／ベルギー大使館

会期／平成23年9月3日(土)～10月23日(日)

〔開館時間〕9時30分～17時まで(入館16時30分まで)

〔休館日〕毎週月曜休館。9月19日(祝月)開館 20日(火)休館、

10月10日(祝月)開館 11日(火)休館。

〔観覧料〕一般800(640)円 高・大生500(400)円

( )内は20名以上の団体料金

65歳以上、中学生以下、障がい手帳携帯者無料



ビエール＝ジョゼフ・ルドゥーテ『美花選』より  
〔ロサ・ケンティフィリア〕〔アネモネ〕〔ライラック〕〔バラ〕〔バラ、アネモネ、テッセン〕 コノサズ＝コレクション東京

古くから人びとは生活の中に花を取り入れ、心を寄せてきました。現代につながるガーデニングの愛好熱は、18世紀頃にヨーロッパの王侯貴族たちによって広められました。15世紀末の大航海時代以降、世界各地から様々な植物がもたらされ、やがて宮廷文化の中で植物を観賞する園芸趣味が定着していったのです。「バラの画家」「花のラファエロ」と称えられる植物画家ビエール＝ジョゼフ・ルドゥーテ(1759～1840)は、まさにそうした時代の寵児でした。ベルギー生まれのルドゥーテは、パリで植物画の基礎を学んだ後、ルイ16世王妃マリー＝アントワネットに蒐集室付素描画家として仕えます。フランス革命後には、こよなく花を愛したナポレオン皇妃ジョゼフィーヌの下で活躍することになりました。ルドゥーテは、ジョゼフィーヌがパリ郊外マルメゾン館の庭園に栽培した世界中のバラをはじめ、様々な植物を記録しながらその名を高めていきました。ルドゥーテの代表的な作品には、微細な点刻による銅版画の超絶的な技法が施されています。科学的な視点に基づきつつ、みずみずしさやはかなさといった花たちの風情を宿す芸術性こそ、ルドゥーテの作品が今も人々に愛され続ける理由でしょう。

今回の展覧会では、ルドゥーテ芸術の集大成となる銅版画集『美花選』を中心に、代表作で人気の高い『バラ図譜』や『ユリ植物図譜』の一部、貴重な水彩画など約200点が出品されます。時を超えてなお、香り立つようなルドゥーテの花たちを心ゆくまでお楽しみください。(永山 多貴子)